

【熊本・益城】「この青空を、戦場にしない」

橋村副党首、憲法前文を朗読し「理想」を語る

5月、憲法記念日を迎えたばかりの7日木曜日。通勤・通学路として賑わう益城町の街頭に、社民党副党首・橋村りかの透き通るような、しかし力強い声が響いた。手にしていたのは、日本国憲法の「前文」が記された原稿だ。

■ 時代遅れ?お花畑? 「いいえ、これこそが人類の知恵」

橋村は演説の冒頭、あえて長い時間を割いて日本国憲法の前文を朗読した。一言一句を噛み締めるようなその姿に、イヤホンを外して足を止める若者の姿も見られた。

「学生時代にこの前文に出会い、この国に生まれたことを誇りに思った」と語る橋村。

しかし今、その誇りが足元から崩れようとしている。

「政府は今、この平和憲法を『窮屈で堅苦しいもの』として放り出そうとしています。自分たちに都合よく国民を操り、いつでも戦争に行けるように、そして皆さんが『自分らしく』生きる権利を縛れるように。そんなふうに変えようとするのに、私たちは立ち向かわなければなりません」

■ 「理想を捨てろ」と、子どもたちに言えますか

特に印象的だったのは、次世代を担う子どもたちへの視点だ。改憲勢力が「理想ばかり追うな、現実を見ろ」と主張することに対し、橋村は鋭く問いかけた。

「これから育つ子どもたちに、『理想を捨てて現実を見なさい。国のために誰かの命を奪いに行かなきゃならないんだよ』なんて、そんな悲しいこと、私たちは伝えられません。人間には想像力があります。誰かの命を守りたい、あなたの命を守りたいと思う力があります。この力こそが、憲法が目指す理想の正体です」

■ 「お利口な国民」でいる必要はない

演説の終盤、橋村氏は「何をしてしても無駄だ」という閉塞感に包まれる社会に対し、力強いエンパワーメントの言葉を投げかけた。

「国の言うことに黙って従うことが『お利口な国民』ではありません。自分たちが歩む道を自分たちで決める権利が、私たちにはあります。上空を戦闘機が飛び交う社会に戻すのか、この穏やかな青空を子どもたちに手渡すのか。決めるのは、政府ではなく私たち一人ひとりの決断です」

憲法の話というと、どこか教科書の中の出来事のように感じがちだ。しかし、橋村が語る憲法は、私たちの「命、暮らし、人権、尊厳」を国の横暴から守るための「最強の盾」である。

「ここ熊本が私のふるさと」と語る彼女の言葉は、地域に根ざし、等身大の生活を守ろうとする社民党の決意そのものだ。毎週木曜日、この場所で繰り返される演説は、確実に益城の、そして熊本の未来を動かす種まいている。

(社会新報熊本県版編集部)

